梅園
春男著

形狀言五種活圖

全

ホ 2
560

門 加
帙 560
巻

梅園春男著

形狀言五種活用圖

下毛

養民堂發兌

宮城縣立図書館

ゆ
こゝ下野人春田春次ゆゑ
和の師梅園翁の手ゆ思ひ
記せるふゝ世ゝこ公ゆ
ゑゝ世つる事ゆ
ゆちゝ世ゝ
ゆ

内こゝ等志九志ゝきとさゝく河北
上を祈こゝにとゝ示せるすりはなりて
近き世人こゝ北考ゝせる語学乃出あるゝ
万葉と出志ゝ北こゝとゝ有まゝおおし
等こゝとゝせゝゝゝこゝゝよ九真さゝゝ
あるこゝゝ志を尺出てくゝ九祝きゝゝか

人てゝゝゝ氏乃名ゝおゝ梅園北花の
実ゝ彩ゝゝゝさやゝ示ゝて立こゝ
一宸北志移ゝんちゝせゝれゝ示し
ゝゝ真説こゝゝ中こゝゝゝゝゝ出ゝゝ
ゝ一ゝこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ志お北ゝ尺ゝ氏ゝ真ゝ志移ゝ北

たゝ後ゝ附て出されゝ一ゝあり
なもまこゝに出たゝ事ゝて今世
所てを人ゝ彫ゝ深くこゝん中を
へき事ゝなむあゝ書の紙をゝ
ゝとくゝをあゝ行中なゝと今
この書を讀ゝて事ゝの子ゝ思ふ

まゝゝ以なゝとあへゝなくゝ一ゝをゝきゝ
ゝ人書の治七年九十一月ゝの
日校中敬正本原書録

こゝに行ひ文字見てとらるる
海ゆのぞ陸津神陸奥津あを
たの神と小戦ふさ山ひとり神ぬさ
かたてい法きまもむろの峯ふ道を
宮つ宮よたとり人ぬさふまとりて
りたい小紫ふそ法ていつとふを海つ法
新とき水とて陸津法屋とき水こと
ま宮法ゆのぞこゝつまりあや

えしらぬきをてふるまきてからふ
屋ちまさ乃まちも老とのたまを深草ふ
はたちりくふ分四の葬道はしらへふ
菱乃根芝紙もこ孫くふふきまさ
古能の文とやあ乃りを杖と紙をめ
はやりを杖とをいてまこを玉はさり
人乃し理まふいしとと

鈴孫笑濫

歌よりも文かくふ詞の活用とくさばまば自他入乱
まを事の意ときがくなりぬふまば詞の活用こるおい
乃ふ思ひあを屋まこ乃ふきたまをとよまり
し世ふハ殊更よこ活せざ花ども自然りかをひて露
みををふもなを屋しを世のてるちゆくふ詞の
ををきもこだまこ乃れく自他の差別もこ乃ぐく
歌りよたこを後の鈴の屋翁詞の八ちをる詞の通路あど
ふ書とりをきれく活用の筋より自他の差別までと
つをかく教へ法を花こい誠よるをとやもたをと
たこ乃屋き書とりふむこの八衢よこく活いを屋く

多くさまざまなる中に四種の活（四段一段中二段下二段）あるもそのまぎらはしき
ひろくと云々次にいはば志志き志く志きくと活く詞の事也その
餘の詞をこれにくらぶればいとせばく詞もまじりさそくなき
なく志志きと活用は詞にいとおほかれどこれらは加行の事なり
活なる其餘の行のはかくはなはだしくまぎらひの詞なりとぞ云てかく
いはまほしきなりまで圖になしたまへれば其活用を知らんを
便なきを義門師の山口栞には圖などをものせられて形状言
の活用を御もらるるは諭さるる所なりしもとも愛たきされ
ど其圖も初學の爲にはなりぬ所なりて猶さとりえがたう
きとめまどはるやうに巳今此活用とらしくせんとする

それいかにといふに山口栞なる圖には志き志く志き志きと又
それに有の字をそへてしりるれと活用詞の類と又けんけく
けしけれの類と又清静などのけくけしけきと活用となる類
の詞と一連にものせられたるはあるぬをだはそれぞれのまれ
こなひとつにのみ圖示しておのおの将然連用截断連躰已然使令
の差別をもわけて示をふくむその圖示したる中にけんけくけし
けきと擧あげしたるを見て定めてまどふる人のなかるべければ
此よしあらしくもいかでひおくなりしとは此活用の條と先達の
うかく解得らるまじとおもはるるをひくくをふくさるなかるに
巳考へえたる説なりて圖をものしたるなる事つまびらかにいふべし

こゝによりて今先達の説の非なることをいふハなかなかにおそれあ
れどやむことをえず己ゝ定むる説をたゞしてこゝに示さんが為なるか
つひおぼえおもむき詞の玉緒七の巻廿二のひらにかゝらんの意のかん
と標して「戀しかるらむ」「れぶしかるらむ」「戀のしげけむ」「こひの志
げゝん云々又「戀しけば」「久しかるべくは」「かしこけめやも」右の細註に
ことてのけもかくの意なく云々といへると此説ちかけれバかゝらんハく志き志く
志きと活く詞に有字をそへてかゝらん　かゝる　かくと
活用詞（ハタラク）にてけんの活用と異なることを圖とみてしるべし
今猶かゝらんとけんとのまぎらハしきをいふも拜にかゝらんハ長空（オホキ　ナキレキ）などの
詞に有字をそへてなりたるがゆゑにかゝらむなしかるらんもかゝらんとなる（りるまとも活くも同事也）

とことなることなく活用してかくなきる也されバこの形状言も
皆志かく又かんハ（過去のけんハ別なれバ除く）長空（ナガク　ムナシク）などのく志き志く志き志きと活く
その轉聲（テニヲハ）と省き去（ハブ　サリ）てあがむなし（志く志き志きの方にすべて截断言の志と躰となる定之）などの躰語
へけんけくけしけきとはたらく辭のそはりてながらむ（長）戀しく（戀）
（截断言　連躰言）さむし（寒）志けきと活くその將然言のけんあり（將然言　連用言）
の差別（ケヂメ）ハかゝんハ連用言より作用言へはたらきかくる詞けんハ躰
語とうけたる詞とのまぎらはしきことよくおもふべし
又詞通路に志く志き志きと活く詞のくのけく
そのもとをなすはまづしなくとつゞけなるくおぼくとなどのよくよく
とよけく行くとうしなどをひしなくをしるべし

なることつねと又つねく世の中のうけくふなきぬつそとなる人
べしこの志ねくなどたるらきのぞるをてるなりとつまどい
かぐそらくのけぞるまてるもけくきの強もりたるもけくといひ
そらはまぢらそうきふ行まやそうはき又くれのぞりたるいたを
固よりけんけくけーけきと活用一つの辭たりを形狀言活
用の轉聲とぞきをそ躰語となるその躰語ふ又この辭を
まを活用となを詞なることを前またぐつふがを殊まつな
けくいつなくも也とつのたぐつをつをふをつ論ぶ
此つなくをを詞の日本書紀 仁德御卷ふつなくをを
思ひのやーけくふ思ひと對勺まよをを玉へるを此なるを

なくのくれのをまたると思ひたぐへるあるたなを
あるくとつを事たるぐもたるぐも無ををなくとつを聲を
きを徒とを無の意と見玉ふをを御歌の意きをんぐる
ー愚按ふまを木より歎字の意をつなくとまを
玉へる形ふ屋ー次の勺のかなくと對語なくべー
又同書まつくくを徒ぐめやとつを事たりをんきぐかをる
とつふ事ををおぼきあぐくを志きと活ふきれば異なり
此例外まあぐやえぎと云々時くくとつを詞のをやーけくをきぐ
け徒なぐをつ徒をかりのまくをんぎをもつふ活ぬと詞と
つふ屋ーをん此をきぐけめやと活くををも志ふー洪外萬葉ふ

うらやしのめやもかしこけめやもなしとあるは皆こ死ぬらめやにおなじ
活也なる同書にいはくましじなるべくましじきはぬまでを上なる
と同じ云ざるなりまで此例外に見あてたれど万十五にもえ
なるべくまではあり同活也（オナジハタラキ）此等のけらしよつきくらちくつばし
偖（サテ）又言靈指南てふ書の中にけんの辭と解示さまてあるところ
ふつらくきんは過去（スギサリ）し事を疑ひ云辭なり云々扨又今一くさの
けん有我思ふ人の事のしらむ其外よけんなるけんあるの類
萬葉にいとく多し是を宣長の説に此けんはかしんの意のけん
なりといへまど然らざかしんはかしんけんはけん本より別の辭な
まぎる事ならる處くもあるまで是はけらんの加をきに移しらを

略（ハブキ）たるのありとのひ又けんも則らん成事知るべしといつらんは
志らくおをもぬと死しとあしど鈴の舎翁の説をばいひ破（ヤブ）
まぎも其いやさ活らむの活用とけるを志ればそ自語相違を
るふいふるんかるさらいふきこまざるふお辭
又同書にいはくきまくはきんを延たりして異なるなし云々なる
いらく萬葉十六にいまも目なくりしめるなひ見ども戀ん年月
久しきをまくに同十八にうち歎き語なやくは云々此二首とけやくの證
歌に並へ出てその説のなきはいつで語けやくのなやくと久しなやく
のなやくまとは活用（ハタラキ）も義理（コトワリ）もて聊るかれをやとは久しけやくはけん
けくけしけきと活くけらかてふ辭へはきれるふて未来（ユクサキ）

をおしもかく詞也又語りけくいかでしんかうかるかくまこと
羅行四段ゑ活用その連用言なるりより過去のけくたぎたるを
なけより又きくくとつぎたるうて是過去と疑ふきをうくなるまづ未
来をうふけきくくと同じかくぎることりとう論とする所此差別い
形狀言をうつること作用言とうつるこふて明らなるをや又つもく
きくいくのはばかりたるうて高く安く低く寒く云々むの類を
安くく高くく低くく暑くくと揉よつくる類まて云こうつるくも
かるくくてふ辞とくれのだりうる詞と心得らまたあきと然
らぎること上の件よりだるこふが如くもく古よりけんけくけく
けきと活く一川の語辭ありてその詞い古今集よりこあるこの集に

こあるもたりまて又つまくくよのこうえくく後の歌ゆも文ようも
を用くこえぎるもありつるまの詞もなりらありいあしく多く
たりて後ちく女化あり又後の集ゑ多き詞のつまくくよかくりを
ちくなきこうたりまい右たりて後ちえくなる化もたり又後ゑ
たる詞の古ふあ化もたあり此けんけくけけ化をの辞ハ日本紀
萬葉集などまいあかく古今集ちうこちこの集ちいやくもく形く
なりにつりをれ中ちもくむくくのこ多くくてけけ化いつくく
の歌文ちもつこもまあくさたてえてあまてくもたりこかのが
えゑ高りたるいぬきいつくをたまたびつきく證歌とあるく此活
用とおくくむ廣くこぐて形狀言二種の詞ハ活用の辞をさりく

體語とも云事前に云るが如くなれど今一きざみ尚くだくて
屈し云ふ形狀言と躰語とも云ふ二ツにわかれまた一ツは二種の活用
とりの連用言と躰とも云ること四種の活用の連用言と躰と
ともに同一事也一ツは前に云ふが如く活用の辭とさうて躰語とも云
其活用の轉聲とさうて躰語よりひる例を一ツ二ツ引てく
志めと屈し云ふ「古今雜下」なれぬれば世の中「同」を子どもやもめと大もと「新古今」
うらてふくかぜ「万葉」を子どもやもめと大もと「新古今」
かまの霧や一夜もうつる「同」海士の苫屋の世や「同」
しれ程もなくなる世やあどうらをもうれつまなかりかと
ほうりもを志きくの活とのどぬく躰とも云る定りなり次に「新古今」拔

さ〻田子はいつ〻先一の名や「同」詠めふけなう〻先一の名や「古神」神
ふふ〻ぬむ〻一煙をあとうらめ一むる一ちと志く志志きと
活く截斷言の志と躰言とかもと上のく志きの格とつ〻か異る
處也さんどづもる定格のたることなきよりく味ふ屈一此外「あ〻く
たる夜をあ〻く一夜「かも〻く」ある妹をかも一妹「わ〻ぎく」たる人と
あ〻く人とあうるよのひ又「ふ〻くなる」緑とふ〻ぎ〻「浅く」たる瀬を
たもせ「ち〻く」たる隣をちうとたうるどゆう小轉聲と除去て二語
つ〻ねを躰語とも云事もう〻ちまもせその定格にて歌文もつく
多一〻云山口栞ともう地論たまびひ〻紀みる屈一
是よりつぎ〻けんけ〻けけ一けきの證歌とたまて猶とも云べ

まり川 將然言けい

日本書紀ニ云ふ〜地ゐるちべのたゝこと かゝし〜墨縄 已 無 ちのかけべなまろ
雄略御巻
かゝんよ云ふゝ〜墨縄

一万七大舟よ真楫おしぬき漕出ゐ〜沖いふうけむ塩いひぬとも

同十六 大野路いとぶもちいしげち志ゝゝゝ君〜かゝて道いひんむ

同七 伊勢の海の海士の島津う鰒玉とりを後もこひのしけむ

同九よ〜ぬ川河浪ゝゝみたきの浦をみづゝありかむこひかゝゝふ

同十二 今たも見ゝりめる相ゝまぢぐ、戀ん年月久〜けゝくふ

同十三 春の日はう〜かゝまき居く君よこひつゝうめゐも

同十九 天雲のゐんよふみあ〜鳴神もゝふよまりてかしこけめやも

一万一吾大君ものなおりゐ〜まめ神のつぎて行くゝるれなゝまくふ

同四ゝゝせゝゝりける思ひとゝ〜行〜い火ゝ水ゝゝゝゝ(ゝ)かけまくふ

此かけあ〜ふのあ〜ハ不のぬの活きたる詞也不のぬの將然言をうるゝさだまり
なまぢなゝもぬふおかけ〜まれハ今ハ無をなゝんあゝくかけ なゝ化とゆふふまれ
らくゝもの將然言ゝゝなゝふ不のぬのけまゝをたるゝゝの辞のをゝりてかけ
かくふとあゝたる詞也ちつゝゝゆゝぢぬふゝゝくきゝゝるもあゝまゝとゝる
ウカヤと俗訳〜イきゝゝえやをゝる行〜ゝと活語雑話ハ論ゝり今ゝゝ社かけ
ゝゝふゝウカヤとゝてゝゝるゝゝ行ゝきゝゝえやもゝワレナカラウカヤ有ゐといふ意也

右ふ引ゝるゝゝゝ〜ゝんまくめゐもなくふゝゝるゝゝゝ將然言と

うゝゝる語辞(テニヲハ)也

次よ連用言けくゝゝまもつゝく多くゝなゝまゝゝゝ行ゝんいゝる

さけまゝゝゝまゝふ行ゝゝゝ〜

万十二 相見まくかりけくもたまぼ君をもわれとまをりてつふりをる

古今雑下 世の中のうけくふたまぬ奥山まろの葉よりぬまる雪やけあはし

後撰春 櫻色まきる衣のふのはまと過る月日をもなし

万十神南備の淺ぬぎ[illegible]れをなつ[illegible]ぬべる君の聲のあるく

万十八長歌 ふのねもれのをなる舞 是正しく連用言より用言へ

此餘うけくはるくさむるくなつるあどあるふつへど

おわうねどろふるぶまり

次は截斷言けり 此活古書まをまくまえざれどもたえ[illegible]

ともつふ屋のつぶさる辞のりはるのるぬある屋しあのる

ら後の歌集まいまれるあるもなるを

風雅冬 ろわるうと空さへえく月のなりもりり白き雲もむり

けり 此外わ人ねば今いで此一首あとなれわく後見なるぞ

おきるひもを屋し此寒ろし なるとい今の人も多くまむをまとつ

ある活用ともなるつふ人ある 假令一首まても截斷言一格の

證ともるたりぬ屋し

次は連躰言けり

万十一人事のあげ紀君は玉章れつうひも屋しまるる思ふる

同九長歌 見ゆくわり君きまきりとなるる紀は汗うきなる紀云々

同十二人事のあげ紀時はきりぐきぬるこなるせばはまはと

新古冬 霜むもぶ袖のかつ紀折けくねぬ夜の月れ影ぞむる紀

一カ三岩戸なる手力もゝなども手弱寸をもめみてあまべに古人のつくれなるく

此手よりけきの讀方畧解本こゝになる紀と四言よりそなりたるとまくれ
たゞたるゝかゝる義門師の山口栞の下巻に此けくも躰言へ連くい例の
き字の方なりとゝひくゝもの證歌に手よる紀のきりをもめとゝ躰語へ
つゞ紀たるとゝつゝ例よひくまくるなりまんとも左葉の中ゝ上ゝ行くる如く
きけ紀君きけ紀時あとけくとゝつゝまぎりけむ

上ゝ行くたる如くけんけくのこゝおゝくけーけ紀ゝつゝもくかゝ
まべ一首たるくも古歌に證けまべ一格と持つ屋ーも屋を活語の
定りゝ將然連用截断連躰已然使令の六例のゝゝ古歌ゝ
こゝんこゝをけるたるゝゝ行くゝと此六例の内ゝまの詞なるも一ツ
けまいのこゝ五ツをまるなどゝくゝと定るものまべ此けんけく

けーけきの詞もけーゝ寒々しの外ゝのもこゝまれども此一ツをて他の
言葉も志つ活用なる例と定むるなり總べくの活詞理こゝる志つまも
然ゝいひくる紀のつとくおゝのまべ假令語格なるまべとて古歌ゝ
證なる紀詞ゝ猥に活に屋つゝるこゝもあく先達もゝ第一先
ゝのまてきまれば何事も古人のつくなる例よりそのまべきに
こゝる

次に形狀言活用の圖をけるくとをくくゝ猶くて
ーくさとて奚ー

く志き
志く志き　の活用圖并受るをゝは

長短深淺厚薄正賢嬉悲戀空

躰語	シ サ ケ 三
連用言	リ
連用言	シリ
截斷言	シ
截斷言	シ
連躰言	キ
連躰言	シキ

右の圖より凡の辭とそぶきたる事はけきたく志きれもて巳のとれまふてはぶ巳るまいたりまど此詞る志き志き有の字をもて再ひかんかりかるかまとやふはたくく使令言のかまと轉じそ多まてなりるあり此說言靈指南まいまかたりつひありつまで今おのまとくくつふ麼一かく有字のとはりて活用とる辭よ一の音と四の音よ轉じをつひる例をもおやりといりせりめ皇すとく形有字のとはりて活ける辭也来有のはばりへ為有見有

か為有の法りいさ見有つまりいまなりと四の音よ轉じて

けんりける凡せらんせりせるせきめりんめりめるめき

と活く同し活用をれとる凡をけきる轉トたりる論なれと

のし初學の人などに紐鏡に志き　けれ　志　志き　志かれと示し
たるをみてこれは鈴の舎翁ののせられたるなれどかゝる活
用あることを後の人なほさかしらに彼是といふすれどゝ座するを
人のかかはりしかたるは係だにあまりむつかしければ今一きはくはしく
くいふ座しとは文まにいふ辞は羅行の四段よりうるまじと活用
しを諸活用言の連用言よりなるものつゞく所の定りおくと形
狀言よりうけつゞけられたるものはつかしきにふなるを
しこれは躰語又は截断言より活きされたる由にて見ても見えるを
きを皆人のものつゞかれはつゞくやうにこそ躰語より截断言よりもつゞ
きてあるはたらしど連用言あるく志くより有といふ用言へつゞく

らありとなるをのらあはらなりてかくするをさして又く轉じて
けきとありたるなれば素よりく志き志く志　志きの活きよりもて
よはたらきたるには非ざる事是にてさとる座しさればこの圖にはけきと
も弱きて次の有字のをはりく活用から　かり　かる　かれとなりて圖の中に載る也
さてこれ此二種の形狀言はこその結びるかどといふ辭に係りては
ぞを連躰言のき文字則ちあるの結びとなれるなり其例古歌より
いくつかを引出て示す座しまづ日本書紀仁徳御巻に
る皇后の御歌に
天智の御巻の童謡に　かにこそあれ島へもあるき　あるきはよき也
ところもころあるふるろもよし
万一十　こゝの底沖とふるあくおふる藻のなにも今こそ戀はせ人もよし

同うらう万に君をそこねはたくひまつの白濱浪のよるよしなき
万十二玉くしろまきぬる妹もあらはこそ夜の長きもうれしかるべき
同十七長歌に野とひろく草こそしげき
同十一難波人あし火たく屋のすしてあれど己が妻こそとこめづらしき
同一長歌にいにしへもしかにあれこそうつせみも妻とあらそふらしき
同六長歌にうべしこそみる人ごとにかたりつぎしのひけらしき
なとあるはみなきをおさへし此を詞玉の緒には古のひとつの格
なり古今集よりこなたにはなしといへるを同縁分に此こといへん
つゝひくいはく已に中昔にはなきとかゝりそきてむすべるが
たくひくはすくれのひとまつすぎしと考ふべし信明集三十七

年ふる程は忘るゝをむしろ思ふなる逢ことめつらしとよれとなし死
かゝる類古人は尚行る所しとのへりかくの如く形状言二種の活
すそれとられきしきすく結ぶの古歌すれ多く何まても後の
世すれとそとかゝまえきとしきときもむすを所ちれいとて稀
なれとこのこえれよむ所つしばやそりなれといふとおぼゆる
なる所きさ絶とそのなまきれ前に何ぞつくふらく素より
これ活よりいくば有字をはりくすらく何まこう絶しくはま
とのへるにかをつゞめくすりまこうの結しかまとするを一の 長有 嬉有
音の加を四の音のけに轉じくなるとひいふなることいふ事の詞に
こと知しかへよく心得おく所きことあるなむ

く志き志く志き志き志きの詞ゑ有字の添りくらりるきと
羅行四段ゑ活く圖并受る助辞（テニヲハ）

	将然言	連用言 截断言	連躰言	已然言 使令言
長（ク）		て	かる	
有（ア）		たり	まそり	ど
有カ		つる	ふらん	ど
癒（ミラ）		し	を	ど
有カ		る	べー	
		き		
		あど		
		ぬら		
	ラ	リ	ル	レ
	ね			
	と			
	で			
	せ			
	ん			
	く			
	ま			
	し			

こゝに四種の活用ゐく四段の活きの已然言とらりるきと活かくると同じ事也第二の音のり文字切る詞とする也きれどめりらんべーの三ッを受ゞく連躰言のる文字とりるる格なることゝるまゝ詞も有字そゝるゝ活くゝゐ結びとなるゝかまと轉じてなるとなるゝと知り玉ふ筆

形狀言轉聲を除去るる躰語ゑふくびけんけくけーけき
の語辞（テニヲハ）そばくゝく活用となるもの圖

	将然言	連用言	截断言	連躰言
長				
短				
深				
浅				
正	ケ	ケク	ケシ	ケキ
賢				
嬉	シ			
悲				

此活用の事前ふくゝふを見くけくを賜ふ屋くゝいおのまが考へえくする説をまびつりとるちかる姫ゝゝ人も仏屋ゝ考まとゞ皆古歌ゑ證くゝかゝい定をるゐ

加をけゝ轉じてけく／けき／けきと活く圖并受る語辞

幽静 速清 寛明 平暖 審長閑	躰言	(サ) さやけき のどけき	連用言 (ケク) で も そ て や
			截斷言 (ケシ) と ろも ら し
			連躰言 (ケキ) かな まで を より

右の詞は有字の添りてらるゝ羅行四段は活く圖并受る語辞

清 有 カ	將然言 (ケム)	(ラ) で も と ん ぬ	連用言 截斷言 (ケリ) て る る て き し る る て と る り
			連躰言 (ケル) る ま を り べ
			已然言 使令言 (レ) で と る

是いさやらさ川らて躰語の加をけゝ轉じたるさの前のけんけく／けきの活とらてさまを思ひまゝ屋らたる詞は有字の添りて活るらん前のく／き／きく／きと活く／きと同じ例なりと知べし

猶又やらまらの例なりひく／く／き／きく／きき／きく／きき／ききの二種の詞を初學の爲はおのまら思ひまきをかいたりあく圖の次はけんく然までも行てるこゝ猶おりる屋しそい此筋はなどゝく／けたりそよ但し有字をそらりるまと活くい二種の詞のうるまたるあきびたるふいてしおだ又さわらさ川らあどの詞いおりゝいなるれば圖は標示したる漢字の外いりくもたる稀び是も別はなるぞ。ら。

の二種の詞のくとけたりもしそ。

く／き／きと活く詞

厚 かぐはしき
清 きよし
濃 こまやかなり
如 ごとし
不祥 さがなき
著 しるき
狹 せばき
高 たかき
少 ちひさし
拙 つたなし
俗ニ氣ノ毒ナルヨ云 くさき
臭 くさし
内恵ノ意ノヤマヒテミエヌヨ云 こころたなき
言痛 さがなき
狹 せばき
繁 しげき
狹 せばき
貴 たふとき
容易 つめたき
俗ニ云ヒ オボツカナキヨ云 つよき
強 つよし
賢 かしこき
黑 くろき
暗 こゝろぐらき
許多 こまごまき
寒 さむき
許多 こだき
白 しらき
猛 たけき
近 ちかし
強顔 つらがまき
疾 とき
穢悪 きたなき
暗 くらき
許多 こまごまき
寒 さむき
許多 こだき
白 しらき
猛 たけき
近 ちかし
強顔 つらがまき
疾 とき

浅 あさき
荒 あらし
甘 あまし
著 いちじるき
幼 いとけなし
轉 うたてき
疎 うとき
多 おほき
重 おもき
動 うごき

危 あやうき
アヤキナレト同ジ心バヘ
俗ニセハレイト云ニ同 いとしき
襲捷 いちはやき
覺束ナキヨ云 うしろめたし
前後氣ツカヒトキヨ云 うるはしき
大 おほきし
遲 おそき
動愚 おろかなき

普 あまねき
無氣味 あやしき
厚 あつし
甚又痛 いたき
鬱 いぶせき
至ツテヨキヨ義ニ云詞 いたし
慨 うれたき
鬱悒 おぼつかなき
心中ニカクルコトハナシ おもひぐまなし
軽 かるき

熱 あつき
赤 あかき
幼稚 いとけなし
寝ヂキナリ いぎたなし
薄 うすき
煩ハシク邪ナル意 うるさし
憂 うれき
無負氣 おほけなし
難 かたし
動 かるき

みじかき 短
かたき 直
ふぶき 鈍
まかなし
ひくき 低
ふとき 太
あさし 安
らうたき ウタシクカハユラミキヨ云
をさなき 幼
めでたき 愛
なめき 無禮
ふつき 憎
そたるし
こしろき 黄
かとき 細
ゆるき 弛
をかき 若
をさるし 不敏
めやすし 見ヨキリマナリ
なき 無
ねたき 嫉妬
まやき 早
ふるき 舊
べき 可
よき 善
をろし 惡
をちかし 劣
ものうき 懶
ながし 長
ねぶたき 睡眠
たしなきたるき サモシキ心底ナルヲ云
ふかき 深
ゆゆしき 目ノ光リテ正面ニ向ヒカタキヲ云
よわき 弱
をろかなし コトワリナキヲ云

赤く赤きと活く詞

形狀言

にくき 惡
かろし 輕薄
あさし 淺々
しるし 周章
はなはだし 甚
いたし 勞
ものめかし 今樣
なまめき 嬉
うるはし 愛
あらあらし 荒々シキヲ云
ものぐるし 侮蔑
ものすさまじ 靈異
ものものし 勤
ものものしし
ものうし 忌々
おもし 重
いやしき 恭敬
うれたし 憂
うたがはし 疑
をしむ 惜
ほしがる 欲有
ものうし 煩
ものぐるし 不審
ものうし 厳
いたはしし 勇
いやしき 賤
かしこまる 畏
うとし 怨
あやし 新
ものものしし 甚シキヲ云
ものがたし 同
ものうし 息衝
いたはしし 厭
うとし 嚴
いそがし 急
ものうし 飽感
うつくし 顯見

疎
面白
可愛
驚タヌオソロシキ意
重
軽々
カヒアリゲノ意
喧嘩
厳
委
物ナレヌヲ云
恐
穏
覺束ナヲ云
俗横着ナルヲ云
頑愚
オシハレヌ限ノコト
端正
奇
俗ニ附合ニクキヲ云
羨
依怙
同
覺
マシムベキヲマシテガルヲ云
香
ハヒガマレクナリ
キハトキコト
同
苦
俗ニヒカヘラレイト云意
不明
愚ナキ事也
表立タルト云意
成長
綾
新
欲聞
同
多キヲ云

悔
嶮
俗ニ大ソウラレイト云意
騒
才學アル人ナ云
親
好色ノ意又熱心ナル意
正
心身ノ自由ニユルムヲ云
無骨ナルヲ云又言タヲモ云
戀
サビシキ意
愚痴
涼
坐
樂
巧
非時
ウラムルサマナリ
穢
好
賢
寂寞
清浮
俗ニ疎遠ナルヲ云
同
落付ヌサマヲ云
遠々
口惜
ヤハラカナラヌヲ云
許多
峻
慕
荒進ノ義也
定カナラヌヲ云
頼
慎
美又之ノ意又希テメタルキニモ云

とゝのめかのき 時節
あらのき 嘆
そばき 烈
あつうはき 似合
ひさき 等
やすべき 俗ニ氣ノヌケタルト云コト
ずるらき 紛
ゆるき 見苦
めざまき 冷眼又妒サマナリ
ものものうき
なやまし 惱
ねがはし 願
くるしき ニキハシキナリ
やすし 誠シヤカナリ
ひさし 久
やどし 殆
まさし 正
むなし 空
めづらし 希見
かなし 俗ニ云ト同ジ
あぬめかし 婀娜
ねるこまし 嫉妬
ゆゝしき 賑
そらし
ふるし 舊
ぶるし 老
うとがやし 欲見
むつらし 心ヤスカラメテ式
ものうし
あらわし 心痛ナリト式ト云ナレ
なのうし 長々
ちぢうし
はぢし 恥
にぎやうし 同
そわたし
ふるめかし 同
ぶるし 禍々
まめし 實貞
むつかし
やさし 艶ナルコト又ハツカシキ意
やまし 病
ゆゝしき 忌々
らうがはし ホノメタル詞
あるまじき 笑
よろこばし 喜
らうがはし ミダリガハシキト云意
をこし 惜
ゆゆしき
らびしき 侘
をこし 可咲
あつうき 懷
ものうし 煩
をこし 雄々

右ハ出ヒたる詞の外ハ近々遠々なるべく二語かさねたるの活用ハ法ノ如くなる詞ハ今ハわかひときてのことなれ是のことなるべきもあれたるも猶ハやとゝ共筋ハなぞらへを流るゝよ偖又くさき志き志きの二方ハ略てけるの詞もこれかくなるとつゝ詞ハ源氏末摘花の巻サ三ハきてこなるあるべきらめひつけてるるつ紀かくなりけるとゝ云々

又須磨の卷三十心をやりくりつもかてなりくるめなどなるい
きくきもきのくもも枕草紙よりてぐうきもどけあうかてなく
なりかきぬあどゆぐみくるも又仲正集よかてなや後の
園よ若菜つくかまりなりくる翁もかてよなどなるくきき
のかくも也又許多ぐきくぐきくぐしあども二かくよはてくきく
同じ意也かくるなぐびぐ猶あくる風じ今いなぐいてかおくろ
かじなくのこ

元治紀元四月

下野國二荒山神社權祢宜
義中講義　梅園春男
登圓平田書

礒城島の倭の國ハ言靈のなくてる國又言靈の幸ふ國とも
古よりいひつぎ来くる詞の道のいとも〻かしこくくえ
なる活用なくくもれはたびざなれのづくれさまりなり
をいまかもなぐ〻事なしを中昔よりとの道漸おくれく
めくく殊よ應仁のなりくるくいつくみもれく詞の活き辞の
結び假字遣ひの格もやぐひよまがひく雅俗のよりなる
ろりなくと鈴の舎翁世よ出て詞の玉緒ひも鏡などなりし
て稱もなるよさきさ往なりなくく後の鈴の舎翁詞の八ちまた
詞通路などなりもさなくよりて言靈の道ふくび世よなきち
かよなくくく大くこの人も詞の活辞の結び自他の差別よぐつも

らかな知らでゆかありたるはいとかしこくよろこばしきことになむ
さるにさてこれ書とよみもとらん人の多きはされたる後にて
おのひ居ましゝをかへる事有る御代の幸なるなふとけしき國々より
里々まいてるまでもれ學ひ所を設けられて皇國の事はさらにふ
もいはん外ッ國々れ文字まで學ばしめんむの大御恵みを其事
司よりたまふ文部省まて初學のもの為に編緝し玉へる單語編でふ
書の始めに八ちまたなる四種の活の圖とかゝげられたるは此の學
ひの始めに皇國語法を志し先むる御心しらひまをかしこきの
きさせ玉へるならむそれらよく此語法をよく學ばさまべくじ
こ此書と譯せられしのぞみて假名とたゞ文へ自他とかわする

の失なからことはなほざりにしかまへて自他を混へぬまでは詞調をぞ
しそ事の意を得ざることなりぬるまでは語學たるわざともかく思
ひなすを屆けるとはいかにぞや然るに單語篇と子供にし
ふるを見るに始めに四種活用圖をば除きてをしへぬ師ど
もあるはいかなることぞや此活用たる皇國學びの肝要なる
ものなればかならず語學の道の肝要なる事我が皇國のことな
らず泰西にてもこれらをもはらとする事なるをやそれ方今泰西學
盛に行はれて志學の徒日を逐て多く成行めるは誠に文明
の徳化とぞよろこびつべき其學に入るもの文典より讀はじむ
とぞこはもろ語法を學び得てよく文法とさとるざまでは

横文を綴ること能はざる泰西文法と論ぜられた法則の品あり

其八實名詞（天地人の類と云）代名詞（汝私彼などと名詞の代に用ひる詞と云）動詞（名詞に屬して働きを行ひ詞と云）我が地人早く走る我が行き得るの類と云）形容詞（實名詞に屬して之と形容する詞即ち風の吹く雪の如き男らしきの類と云）副詞（動詞形容詞及び他の副詞に副て形容を詳ふする詞我が好ん書く汝ハ屋ク来りしの類と云）前置詞（名詞の前に置る助辭なり馬に乘る山へ登るの類と云）接續詞（文章と連續せる辞也皇國のと文字の類と云）間投詞（嗚呼あゝの類歎息の辞と云）以上八課に分つ是と英國の八品詞と名付と云へりと雖八課の中實名詞を固有名詞普通名詞無形名詞の三類に分ち又代名詞を人代名詞關係代名詞疑問代名詞指示代名詞の四類に分ち其に人稱（一人稱二人稱三人稱）性（男性女性中性通性）數（單數複數）格（主格自格物体格獨格）などの變化の諸法あり形容詞動詞副詞前詞接續詞間投詞の如きも類を分ちて數種の名目あり詳細

といふ所〻皇國い古ゆ分かる言舉こそあれ其實用の語法おのづから自然に聊ぶるもの〻〻假令泰西の語法に比較せるもさらにたるこゝ所をやさまでも學ぶ人の多きをつゝみ世ぬ既に鶴峯戊申翁語學新書とはきれ彼國の十品四格に比較して皇國の言語を九品九格と定め九品（實体言虛体言代名言連体言活用言形容言接續言指示言感動言）を九品也分ちて六十八等とし猶又細目に分ちて三百餘種とし又九格とのゝい能主格（モノシルサダマリ）所生格（ウセラル）所役格（ツカハル）所奪格（トラル）招呼格（ヨブ）と躰言助字六格とし現在過去未來を用言助字三格とも皆古歌古語を引證して語格の活用を微細に說ひるまきなれども微細にして却（カヘリ）て初學の人の

惑を生じくるを解しかくてをめきび已い是等の名目はかもぞ大らふ皇國一切の言語を躰用の二ツふるゝ此二ツの中に彼八品詞も九品九格もこれをうるゝことなり猶次の圖をこれぐ

躰
- 有形躰い日月山川鳥虫草木の類を云
- 無形躰い春夏秋冬上下左右の類を云 但語辭なるものもこれふ屬もこれり
- 轉用躰い活用言を轉じて躰となると類を云也そい

万葉集に君らゐ紀けあげくなりぬ後撰集にはしふ枝うつるもよ拾遺集にこゝあひの松い七日よ成るけり同集ふ道さふれぐふ立なかくゝど古今集にうまてるゝやゝ

もゝふせん古今我戀いゝ山かゝまのゐるもきやゝりさよきれと考る人のもの紀源葵行きゝ所や人いありたつあこひを躰言と考る定り也

用
- 作用言い詞の八ちすれるゝ舉らきれる四種活用の詞とりと云也 此活用ふ將然言連用言截斷言連躰言已然言使令言六法れりゝ現在過去未来の差別となるあり
- 助動言い語辭ふて活用もゝものを云とおりたりけりめりけきしゝりゆくぬ畢ゝがぬ不ゝがつんめあど活用もる類ゝ將然言以下の例作用言ふあるゝと考る為
- 形狀言いくしきおくおおきと活く詞の類と云已既ニ形狀言五種活用圖をこれもて貴賤善悪等の類の詞をつゝひわるまい其書よつきてくゝを事いさゝ極

皇國一切の言語右ふたつに躰用の二ツふりある事ゐ用言ふ
つゝそい將然以下の六法をもつてきるいなり又一ツ詞の自他
ふ分ちゝ其自他ふおのゝ六ツの差別をなすもとい一ものゝ
無情自然トいフナル烟ノ立ツ浪ノ立ツの類を云ものゝ
有情テマヘニテヲウスル人ノ立ツ多ノ立ツの類を云二ものゝを
三他ゝ然ちる物ヲ他ノタメニヲウスル花ヲ見スル哥ヲ聞カスル四他ゝ然せちる他ニ云ハテヲウサスル人ヲ立ル書ヲ讀スルの類をふ
五自ラ然せらゝ我ガサウサル、ナリ感ちゝの類を云六他ゝ然せらゝ人ニサウサル、ナリ感ちゝの類を云カく
六ツふゝるゝ事千言萬語皆しゝ也此差別をゝてゝをせざるべ
他
からゝの事をつゝと思ふゝ自れゝよりるをみつゝれ意すをつゝ他
の事ふきてなきてきく意義混雜ゐ得をゆめるもとよ
りくふゝくんを用ふ得きい詞の活ふゐむとの活の規則を知
らんとおもゝ皇國語學書詞の玉緒玉緒繰分詞八衢活語指南詞通路山口栞語學新書活語雜誌を
よくよみくうまく心ゝ入れゝ屬ゝ初學の時ふ皇國の語學とよ
くいきゝ分ちい成立の後泰西の文法を譯ちる時ゝたりて假字
のたゝひ自他の誤ヲ得ゝとゆめるもとばされば小學校ふゝく
單語篇を教ふる師ゝちゝ四種活用圖をゝねもゝちゝよをく
ふれゝくゝるゝい已先ゝ著ゝ置ゝる形狀言五種活用圖とゝたゝ
かゝ木ゝ句ちちゝたつゝ今れ世ゝおのゝい語學の大ゝる用
ゝる事をつゝかの屬ゝふ此書のゝまゝ人ゝたゝ

明治七年十月　梅園春男再誌

跋

身よ白ふ桜園あるしハ出雲男の心婦りなし
おさなきより手習ひに心をよせしへきを
うけたまへの日もよるをもわすれ冬の夜も
ねるを忘れて玉さかに神代のこと人の心をしり
きはめて学ひなし給ひし時あるを前りて
るいれ古川の言葉を知らひてはかの働き
咲き久しく法を聞に経あひて古ひかを
二つ経つることの一まき清書して学をとひし

梓にあるおしへの世に経ひを自ら見むとしかは
りといふを桜のいはまにあるとしてとより
きはしふミ枝給の屋をおもれ世にまかせて又心
華へ姫川ここのかたへ備へと知をとくに合せてく
よ海はふとりたる池はよ向ふことさやうなる月と
見ることとまでにならて学ひまの時しるよ成りか
ゆのむとおもおほるかも

桜井豊満述

人丸の留守

賣弘書肆

越後高田　藤屋直三郎
信州善光寺　小桝屋喜太郎
下總佐原　正文堂利兵衛
常州水戸　須原屋安五郎
同　土浦　大國屋彌助
野州宇都宮日野町　荒物屋新五郎
同　明神前　萬年屋忠平
同　杤木　叶屋儀平
同　萬町一丁目　河内屋甚平